

# 聖書翻訳の問題

波木居齊 二

教皇庁聖書委員会が聖書の現代語訳を奨励したためか、各国でカトリック教会の聖書翻訳が多数現われているようである。気をつけていると、フランスはとくに最近カトリックの聖書の翻訳が多いように思う。そのうち、エルサレムの聖書学院の監修した、いわゆる「エルサレム聖書」がとくに有名である。ドミニコ会所属の聖書学者がこの翻訳に多く参加していることは言うまでもない。はじめ分冊で出たが、完成後、分冊の序文、注解を圧縮し、本文を主とした種々の型の版が出ている。この仏訳からの英訳まであるようである。そのほかフランスのカトリックの聖書には、古くからクラムポンの訳（最近新約の部分はトリコが改訂）があつたが、またピロークラメの訳、ベルギーのマレスー聖書（未完）などほかにもいくつかの訳が最近出ている。

プロテスタントの方は現在、教会で用いられているスゴンの訳（改訂）と「総会訳」のほか、「百年記念聖書」（新約聖書の

方はゴーゲル・モニエ監修）、変つたところではソルボンヌの現代ギリシア語の教授であつた、故ペルノの四福音書の訳、その他にもいくつかある。もちろんここでは注解者の翻訳は含めていない。

しかし筆者が言いたいの、カトリックとプロテスタントの訳がかならずしも一致していないということである。それぞれの翻訳者が使用したギリシア語本文がそんなに違はずはないと思うが、これはどうしたことであろう。

近頃、教会一致運動（エキュメニク）訳と称する聖書がフランスで出たが、なにのことではない、「エルサレム聖書」の各書にカトリック、オルトドックス、プロテスタントの神学者が、それぞれの序文を書いているに過ぎない。最近またエキュメニク訳と称する聖書の第一冊として、ローマ書の翻訳が現われたが、これはカトリックとプロテスタントから各一人が訳し、あとで数人がこれを校閲したと言ふことである。これには訳者の

の名が出ていないのが解しかねる。

本稿は、カトリックとプロテスタントの訳が一致しない（すくなくともフランス訳では）ことを、種々の意味で有名なところを一つだけ書いて見たいと思う。

実は数年前本誌に執筆の依頼があり、つぎには書かせていただくと断つた手前、あとから原稿料はないと言われても、今回は逃げるわけにはいかない。編集部からテーマの指定があつて、「聖書の時代」という注文である。数頁でこんなことを書く器用さは筆者にはなく、またわが神学部諸先生方に依頼しても躊躇されるであろう。東京からそのことを電話で問合せて見たら、聖書についてならなにでもよいと言ふことらしい。本稿は本誌の大方の読者にははなはだ興味がでないことは十分承知しているが、テーマを指定して依頼された側に責任を転嫁しておく。

マタイ福音書一章二十五節は、「しかし彼女（マリヤ）が子を生むまでは、彼（ヨセフ）は彼女を知ることにはなかつた」とプロテスタントのフランス語聖書は大体一致して訳している。もちろんギリシア語本文に忠実である。しかし例のエルサレム聖書その他のカトリックのフランス語訳は「彼は彼女を知らなかつたのに、彼女は……」となつてゐる。右の聖書だけはこの注にギリシア語本文の文字通りの訳をあげているが、これだけではマリヤの無原罪懐胎（永久童貞）を肯定しないが、そのことは福音書のその他の箇所と教会の伝統から推定されると述べている。福音書のその他の箇所というのは「イエスの兄弟」

のことも指しているであろう。やはりエルサレム聖書のマタイ十二章十六節の注には、マリヤにイエスのほか子供はなかつたが、近親、たとえばいとこのごときがあつたと説明し、いとこをヘブル語やアラム語でも兄弟と呼ぶことがあると述べている。また別のカトリックの聖書には、福音書の著者がこのように書いたのは、ヨセフはマリヤのイエス懐胎となんら関係がなかつたからだ。四・五世紀の教父ヒエロニムス（聖書のラテン語訳、ローマ教会の公認聖書、いわゆるウルガータの訳者）によると、同じ場合、ラテン語の「ドーナク」、ギリシア語の「ヘオース」、ヘブル語の「アド」は過去の行為を否定し、将来もなにも変化もなかつたことを意味していると言ふ。たとえばノアの大洪水のとき、からすは「水がかわききるまで（ドーナク）」箱船に帰って来なかつた（創世紀八・七）。これはからすが大洪水の終つたあと箱船にもはや帰らなかつたことを語っているのと同じだと言ふのである。プロテスタントでは、この本文をヨセフはマリヤがイエスを生むまで彼女と関係がなかつたが、その後マリヤは童貞に留まつたはずはないと言ふ。これに対してカトリックはこの見解は誤解であり、「……まで（ヘオース・フー）……」と言ふ用法は後も同じ状態であつたことを意味するのだと反対する。

ギリシア語本文はどうなつてゐるかと言ふと、ギリシア語ヘオースは「まで」とか「あいだ」を意味し、この語を除いて訳せば、文章の大切な性格をなくしてしまう。もしエルサレム聖書その他カトリック訳聖書のように訳すためには、ここの本文

にはコーリスとかアネウという前置詞を使わなければならないであろう。さらに問題の動詞の前の「ヘオース・フー」はマタイ福音書には十九回使われているが、そのうち三回だけ「あいだ」と訳せるが（問題の一・二五には無理である）、あとの十六回は行為の変更あるいは問題の瞬間の後の事実を予想させるのである。ヘオースと言う語は新約聖書のなかになく、動詞のまえに十七回、名詞のまえに五十六回、名詞化動詞のまえに三回使われている。ヘブル語のアドもヘオースと同じ意味である。それは旧約聖書には約千回は使われている。ヒエロニムスがどう言ったとしても、ヘブル語の「アド」はギリシア語のヘオースと同じく、後になんらかの変化もなかったことを意味すると言っただけではない。

マリヤの無原罪懐胎の教義は一八五四年、ピウス九世によって告知され、さらに一九五〇年、ピウス十二世によって再確認されたが、その根拠は受胎告知のとき、マリヤの言葉、「どうしてそんなことがありえましょうか、わたしはまったく男を知りませんのに」（ルカ一・三四）の解釈であると思われる。

ところがこれには障害がある。それは「イエスの兄弟たち」のことである。カトリック教会は、イエスに弟妹があったかどうかという兄弟（ギリシア語のアデルポス）を近親者であると言う。事実、そういう例は旧約聖書に少くないが、さらにカトリック学者によれば、マリヤがイエスのほかに子供を持っていたら、そしてヤコブがイエスの真の弟であるとし、彼がエルサレム教会の初代の司教になったとすれば、ほかの兄弟も初代教

会に重要な地位を得たはずであるが、そう言うことはない。さらにイエスの十字架の死のとき、主はマリヤを使徒ヨハネに保護を依頼するはずはないと言う。

ここでは（ルカ一・三四）カトリック訳もプロテスタント訳も一致しているが、カトリックの訳には注解がついている。エルサレム聖書によると、この表現は事実としてマリヤとヨセフに肉体関係はない。すでに確実で決定的なことであったのでこのように述べているのだとする。マリヤが永久童貞の誓いをしたならば、「私は男を知らないのに、どうしてそういうことがありえましょうか、あるいは「私は処女でいなければならないのに」と言わなかったのであろうか。しかもこのギリシア語本文は現在動詞で「私は知らない」であって、未来動詞ではない。福音書記者はイエスの生まれるまえだけ、マリヤは処女であると言っているだけのことである。

イエスの兄弟について、カトリック神学者はイエスの兄弟たちと言うのはいとこのことであると言うが、もともと近親、血族あるいはいとことしなければ、カトリックの教義はくずれるのである。「イエスの兄弟たち」というのは福音書の数か所に見られる（ルカ六・三には妹たちのあったことも記されている）。マタイ一三・四五ほか。したがってイエスの兄弟はマリヤとヨセフのあいだに生まれたイエスの弟妹と見られるが、カトリック教会の伝統と教義に矛盾する。もともと東方教会では、かれらはすべてヨセフの先妻の子供であるとして、カトリック教会の伝統であり、教義であるマリヤ無原罪懐胎説に同調

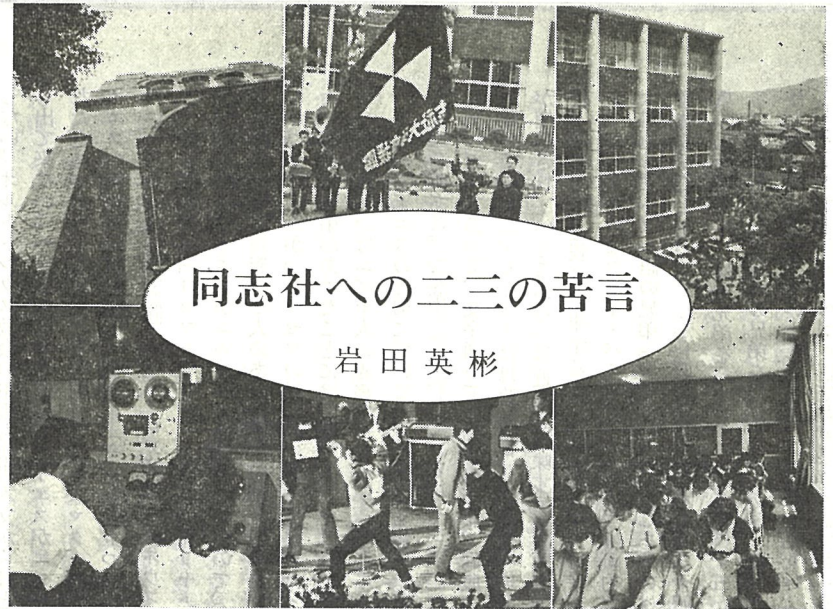
しない。オルトドックス教会の主張も聖書本文からはどうしても出て来ない。ヘロデの暴虐を避けて、イエスがエジプトへ逃れたとき、ヨセフもマリヤと一緒にであった（マタイ二・一四）。イエスの両親は過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた（ルカ二・二一）。父母を意味するギリシア語は「ゴネウス」である。ある写本には「ヨセフとマリヤ」とある。マリヤとヨセフが知らぬ間に、イエスがエルサレムに留っていたので、両親が彼を探したのは親族や知人のあいだで、兄弟たちのあいだではなかった。したがってヨセフの最初の結婚で生まれたイエスより年長の兄弟があったことにはならない。十二歳のときエルサレムに行くのはユダヤ人の義務であったからである。

ところでイエスの兄弟について記述している箇所は新約聖書に十五か所ある。「兄弟」に使われているギリシア語はすべてアデルポスであって、文字通りでは同じ母の子、同腹の兄弟を意味している（デルピュスは母胎の意）。どの写本にもこの語が使用され、いとこあるいは近親を意味する異説はない。両親、親類また近親を意味するギリシア語（スュンゲネイア、スュンゲネースまたはホイ・パラ・アウトウ）は新約聖書に十六回ある。ヘブル語の兄弟「アーハ」はいとこあるいは友人を意味することがある。しかし旧約聖書に現われる三十四か所が真の兄弟であり、異父兄弟を意味しているのは十五か所である。しかもそれは信仰の兄弟を指すこともある。親類の意味で使われるのは五か所、いとこのはただの一回だけ（歴代上二三・二二）である。ヘブル語でもギリシア語でも「兄弟」は

いとこを意味することはなかったようである。しかし新約聖書にはギリシア語のいとこを指す語（アネプシオス）がある（コロサイ四・一〇）。もともと旧約聖書の場合のごとく、兄弟という語は本人、信仰の兄弟、あるいは真の兄弟を意味したことは言うまでもない。それにしてもその十六か所のうち十四か所が真の兄弟を意味しているのである。

くだいようだが、新約聖書は兄弟をいとこの意に使っていることはないと。マリヤが連れていた子供たちが、彼女あるいはイエスのいとこ、近親、親類でなく、ほんとうのイエスの兄弟たちと解するのが自然である。さらにマタイはイエスがマリヤの初生児で、ただ一人の子供であるとは述べていない。姉妹（アデルペー）の場合もヘブル語、ギリシア語ともいとこを意味しない。

もちろん筆者にとって、カトリック教会の教義の真偽は問題でない。教会一致運動にカトリック教会は賛意を示し始めたと言うが、ローマ教会はその教義を他の諸教派に無理に押しつけるのではあるまい。望みたいことは両派の聖書翻訳が一致するときに来ることである。しかしそれはいつのことであろう。フランスのように日本でもエキメニカル訳聖書と称するものが企画されたいとは言えない。しかしプロテスタントの聖書学者がこれに軽々しく参加することのないように願いたい。本誌の性質上、詳細な証明と専門的な問題を多く省略したことをお断りしておく。



## 同志社への二三の苦言

岩田 英彬

私は京都生まれの京都市民である。したがって高校時代のクラスメートには同志社大学に入学したものが多くいた。私が高校を卒業したのは昭和二十五年だが、そのころの京都の公立高校では、まず京大を目指し、それがダメなら、同志社というのが、もともとポピュラーな進学コースのようであった。

生ッ粋の同志社マンの家庭に育った人はそうでないが、私たち京都の一般家庭に生まれたものには同志社という学校ははじめからぜひ行きたいという学校ではない。しかし国公立に入れなかったときに入る学校であり、そして通学していて、そんなに世間態の悪い学校でないというところが通り相場でなかったかと思う。もちろん、このような考え方は俗っぽいのもよいところだが、筆は曲げずに、思ったまま書かしてもらうことにする。

さて、このようにして、同志社大に入った友人たちとは、もちろん、学生時代にもお互いに交際していた。そして、雑談しているうちに談たまたま同志社に触れることもよくあった。

私も同志社を創立した人が新島襄であるぐらいは知っていたが、彼らの中で、新島先生なり、同志社精神について敬虔な態度で語るものが多かったくないなかつたのは、今になって考えてみると、驚くべきことであつた。

多く聞かされるころは同志社の授業料が高いという話や、女の子の話だつた。

「学割をもらうのに手数料が要り、校内に一步入るところで金を取られる仕組みになっている」と自嘲的なせりふを吐く奴もいたし、ゼミの人数が多くて話にならないと嘆く男もいた。

かなり多いのでなからうか。

このような人たちにとって、大学に入るということは早稲田大学に入ることでも、立命館大学に入ることでも、大した違いはなく、とくに同志社大学に学んだということが強烈な精神的痕跡を与えていないように思われる。

極言するならば、同志社という学校は新島襄とその建学の精神を中核に持ちながら、その中核が本来の輝やきを隠されているといえようか。ダイヤモンドの美しさを持ちながら、そのダイヤモンドは灰の中に埋もれている感じがなきにしもあらずである。

このような見方は同志社のよさを抜きにした乱暴な見方かも知れない。しかし、灰の中のダイヤモンドの光に気づかず、卒業してしまつた人が多くいるのではないだろうか。少なくとも、このダイヤモンドを得るには灰をかきわけて見る努力が必要であるし、灰の中にダイヤモンドがあることに気づかない学生が、その灰をかきわけないのは、学生の責任だといふのはけつして当を得た答でない。

\*

最近、三島由紀夫が書いた葉隠がかなり評

しかし、こんな話はべつに同志社に限ったことでないし、マスプロ講義は京大に行った連中でも法経組は御同様である。

ただ、新島襄について私たち他大学に行った友人に何らかの形で、誇りを持って話そうとする人がいなかったことは考えるべきことでないだろうか。同志社に行った友人から新島襄について聞かされた話といえば、彼がアメリカに行く途中、船の中で大小の刀を処分したということぐらいしか私は覚えていない。それはちょうど、今の子供が神武天皇や楠木正成について持っている断片的な知識のようなもので、その人物が歴史的人格をともなつて、その人の心の中で生きていない証拠でないだろうか。

私などは、たまたま新聞記者として、仕事の必要上、同志社の歴史や新島襄の人となりについて少し調べた程度である。それでも、仕事をした印象からいえば、同志社の創立前後のいきさつはまさにドラマチックな要素に満ちあふれており、小説的感動を与えるというところである。同志社に行っていた私の友人たちはなぜ、このような話をしてくれなかったのだろうか疑問が湧いてくるのを押える

ことができなかった。  
そして、それに付けても思われるのは同志社に学ぶすべての人たちが、立派な先人の遺産を精神の栄養として卒業して行つたのだろうかということだつた。

\*

同志社といえばお金持の行く坊っちゃん学校という通念が今も京都市民のあいだには残っている。もともと、現在は、ウィーク・デ一の屋下りごろに同志社大学に行ってみると、自家用車を運転し女子学生を誘つてドライブに出かけるブルジョアの子弟あり、竹の棒を横たえて出撃するデモ隊あり、ビートルズまがいの男からフーテン的スタイルのものにいたるまで、まことに色とりどりで実に愉快である。

しかし、このような雑然とした雰囲気の中で、ともすれば建学の精神といったものが見失われようとしていることも否めないところだろう。そのような中で、最近、新島精神研究会など、学生のあいだで少数だが自発的な運動の芽生えてきていることは望ましい現象である。でも、ついに卒業するまで、同志社本来の精神に触れずに過してしまつた人たちが

判になっている。三島由紀夫が葉隠をどのよう  
に読みこなしているか私は知らないが、葉  
隠冒頭の夜陰の閑談で「御家来として国学心  
懸くべきことなり。今時、国学目落しに相成  
り候」と述べているのは注目すべきところだ  
る。述者、山本常朝が、ここでいっている  
国学とは佐賀藩の基礎を築いた竜造寺剛忠、  
鍋島直茂らの残した事業であり、その人とな  
りに関するすべての知識を総括して、指して  
いる。彼はここで「その道々にては、その家  
の本尊をこそ尊び申し候。……釈迦も孔子も  
楠木も信玄も終に竜造寺、鍋島に被官懸けら  
れ候儀これなく候へば、当家の家風にかない  
申さざる事に候」と述べ「泰平に候へば、次  
第に華麗の世間になり行き……奢り出来……  
上下困窮し……若き者共は時代の風ばかりを  
学び申すべく候」と当世風を批判し「国学得  
心の上にては、余の道も慰みに承るべき事に  
候」といましめている。

私は同志社の場合、新島襄と、その精神を  
継承し、発展させることに努力した人々の遺産  
が同志社の国学、だと思う。外来の思想なり制  
度は、それを移入するに際して、それを植ええ  
つける土台ともいうべきものが移入側に用意

されていないとだめだというのが私の日頃の  
考えである。それは、ちょうど、動物なり植  
物なりを輸入した時、在来種とかけ合わせ  
て、はじめて、その国の風土に適した品種が  
できるようなものでなろうか。

その意味で、いわば土着の思想ともいうべ  
きものほもと大切にしなければいけない  
し、新島先生とその精神といういしずえの上  
に、立ってこそ、同志社の発展も期せられる  
というべきである。

このような点で、同志社に關していうなら  
ば、新島襄という人について、学校側のPR  
は充分といえるだろうか。具体的にいうと、  
昨年、新島旧邸を見学してもらったが、た  
いへんおもしろかった。こういう所は日常、  
開放して、少なくとも同志社の学生がいつで  
も見に行けるようにすべきだろう。学校の一  
隅に記念室なり、記念館を設け、そこに行け  
ば、新島襄の一生がわかるような設備も作る  
べきである。目で見、興味を持てば、心あ  
る学生はその著作などにも目を通すようにな  
るだろう。歴史的事実をふまえた短篇映画を  
制作して、入学時に学生に見せるぐらいの努  
力をしてよいではないか。今の学生は受け

身の教育で大学の開門まで来るテレビッ子だ  
から、視覚に訴えることは大いに考えるべき  
だと思う。

そんな事をしなくても、学生はけっこう集  
まるし、何を苦勞して——といわれれば、そ  
れまでだが、一人でも新島精神を身につけた  
同志社人を世に送り出すことは、ある意味で  
は同志社に課せられた国家的課題だと思うの  
で、ここまでいわれてもらうわけである。

\*

つぎにいいたいことは同志社は都会の学校  
であるということである。そして、その都会  
は文化都市といわれ、学者にとって、まこと  
に住みよい京都である。学問的に恵まれた環  
境ということとは、大変よいが、手放して喜ん  
でいるわけにいかない。どうしても、人情が  
おだやかになり過ぎ、野性のたくましさがな  
くなってしまっただけだ。あまりぬくぬくとし  
た居心地のよい環境は逆に人間をスポイルし  
てしまう。開拓精神といったものが欠乏して  
くる。古来、京の地ほど、地方のエネルギー  
が吸いこまれ、そして、それが最後に都会化  
して、力を失ない、没落して行った所はない  
だろう。同志社にしても、初期の発展を裏付

けた熊本バンドの歴史を考えて見ればよい。  
個人なり、集団にしても、まわりから圧迫が  
あり、逆境にある方が、それをね返して、  
のびてゆくきつかけとなることが多い。

その意味で私は同志社がいつまでも相国寺  
の一角に安住しているのではないと思う。東  
京阪神間にメガロポリスの形成されつつある  
今日、大学の巨大化はやむを得ないところだ  
る。京都から目と鼻の先の田辺に行くか行  
かないかぐらいでガタガタしてはだめで  
ある。学生の数ほもつとふやしてもよい。マ  
スプロ講義を補うには大学院生をチュータ  
ーに使うなり、いろいろと考えたら手が打て  
るはずである。授業料を上げずに大学のスケ  
ールを大きくすることはできると思う。

率直にいわせてもらおうと、すでに文学部の  
社会学科は単一学部として独立すべき段階に  
来ている。英文学科は単に英文学科のみでな  
く、他の主要語学専攻も加え、外国語学部な  
いし、国際学部に発展さすべきである。そし  
て、文学部はかつて大学の核であったという  
観点から、英文学科も含め、少数の学生を中  
心に学究の場として保存、発展したらよい。

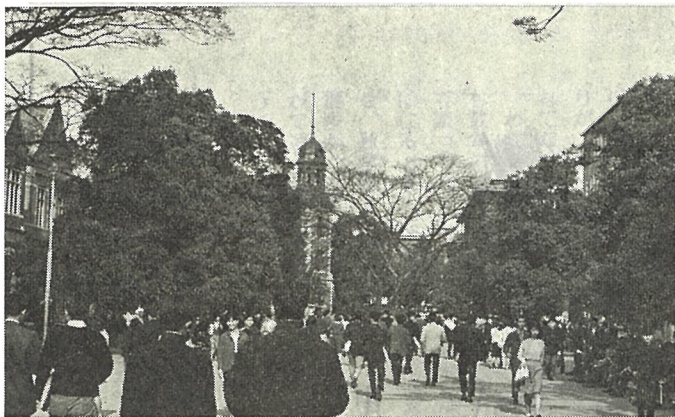
\*

同志社は国公立の学校でない。したがって  
国費による補助はきわめて薄い。しかし、そ  
の不利は逆に見るなら、国による束縛はない  
ということである。その立場を生かして、国  
公立にないよさを大いに出せばよい。

私は遠からず、私学の問題も、国家的背景  
で国全体が考える時代が来ると思う。そのと  
きになってから、同志社の発展を考えるよう  
では時機を失している。私学全体が将来を  
見通して、機構を整備、充実し、極端にいう  
ならば、自民党政府のやり方を逆用して、既  
成の事実を国家に押しつけてやってもよいで  
はないか。

政府は国民のためにあるものだから、われ  
われ国民は身に合わなくなった服を脱ぎ棄て  
るように、政府を変えることができる。いく  
ら懇請しても私学の問題を真剣に考えない政  
党や政府は私学が丸となったって、世論を喚起  
し、これを倒すことに努力したらよい。私学  
の雄である同志社にはそれぐらいの気魄があ  
ってしかるべきだと私は思う。

(毎日新聞記者)



大学・明徳館前の風景

## 校庭の木々

中堀愛作



十一月の末近くなると、中学のチャペル前の榎の葉っぱが風にふかれてばらばら散って来る。それを小さい中学生がとらえようと思つて追っかけるのだが、なかなかとらえることが出来ない。わいわい騒いで面白そうに追っかけまわるのが、晩秋午後の校庭風景だったこともある。

葉が落ちてしまうと、細い枝と黒い小さい実がよく暗れた寒空に、夕陽をうけてくっきり残っているのが実に美しかった。太い枝や細い枝のたぐみな構成を、私は幾度もいくたびも描いて見たが、絵にはむづかしくて、しかもその美しさを眺めては讃嘆するばかりだった。

榎の太木は聚芳館の傍らにもあるが、二本とも立派な木だ。四月の末頃から五月の初め、新芽の出る頃になると、毎年中学一年生にそれを写生させたものだ。めいめいある者は中央に太い幹を大きくとり入れて複雑な立体感を黒々と、ある者は濃いねずみ色に苔の緑色も塗って描いているし、また、ある者は空を見上げて、青空をバックに小さい葉の出た枝の組合せに苦心しているのもあった。その新葉の色が、チャペル前のは軟かい淡茶色だが、聚芳館傍のは初から黄勝の新緑だ。これらは二つとも実に美しい。或はチャペル前の淡茶の葉は実は花なんだろうか、一度生物の先生に教わりたいたいと思ひながらいつのまにか六月になって二つの木は黒いほどに繁り、その濃い涼しいかげが若い人々の爽やかな休みの場所になり、しっとりした梅雨空の頃は豊かな深い色で私どもの心をおちつかせてくれたものだった。雨に湿った幹や太い枝の緑に溶け込んだような清らかな

さを私はどんなに好ましく見とれたことだろう。

安中の校友半田さんは、この榎の太木を眺めることに、讚美歌二三四B、「芽生え育ちて地のはてまで、その枝を張る樹とはなりぬ」を想い出す、とのことだったが、あのチャペルの前に何時頃からあの木はあったのだろう。実に同志社とともに大きく芽生え育った木のように思われるし、同志社に連なる人々には実に忘れ得ない太木であり、その年ごとの季節の移りかわりが、若い学徒たちの年々の成長にも連なっていることが想われない。

われらの校庭にはその他にもよい木が沢山ある。中学だけでも数本のヒマヤ杉が大きく枝をひろげて繁っているし、いちようの木々は季節になるとぎんなんの実を豊かにみおらせ、秋落葉する前の黄葉の明るさは、収穫多かった第二学期の行事とともに、やがて迎える同志社創立記念週を飾るようにも思われる。

彰栄館の前庭に老いながらも生きていく木ささげはどんな思いでわが学園の歴史を見まもっていることだろう。木造平家建だった古い立志館はからたちの生け垣でかこまれていて、とげのある曲りくねった枝と白い素朴な花と緑のまるい実とが写生したりデザインしたりするのに



よかったが、今はどこにも残っていない。校庭のしきりにこの頃は榎の木が植えてあるが、あれも木当によい木だ。五月ごろ新しい葉が育てきて古い葉とかわる頃の茶がかった緑の若葉が空をうつして光っているのを見ると、限りない可能性に胸をふくらませていく若者の姿のような気がすることもある。

その季節には榎の葉も新緑ではばつと明るく輝いている頃だ。

(校友・元中学教諭・画家)